

日タイ大学生による短期交流活動の意義と今後の在り方  
—タイにおける日本語学習者と教師の視点—

横田恭一  
アサンプション大学 文学部  
鹿目葉子  
東京国際大学 Japanese Language Institute

要旨

本調査は、タイの大学における日本語学習者と教師が、短期間来タイする日本人大学生との交流をどのように捉えたのかを明らかにし、今後はどのような交流を実施すべきなのかについて検証することを目的とした。準備の有無、期間、活動内容が異なる、3つの交流に参加した日本語学習者及び教師を対象にアンケート調査を実施し、その結果を考察した。分析の結果、学習者が、自分たちと同年代の日本語母語話者である日本人大学生と交流したことにより、日本語の知識を得たり練習をしたり、生の日本の情報を得たりしただけではなく、自身の日本語能力において自信や気づきを得、同時に、日本語学習を続けていく動機付けや意欲の向上を得、更に、新たな友情を育むことができたと感じ、交流を有益であったと評価したことがわかった。しかしながら、参加人数の調整や活動内容に関する打ち合わせなどの準備が不十分であったり、交流時間が短かったり、活動内容が学生主体ではなかったりした交流においては、同様の成果を全て得られたわけではなかったと、担当教師が考えていたことも明らかになった。今後は、双方の学生が、お互いを、知識や経験を提供も享受もできる存在であると認識し、「協働」することによって、「学び」や「友情」といった創造を得ることができる交流を実施すべきだといえる。

キーワード: 短期交流、日本語学習者、日本人大学生、協働、学びや友情

# Significance and Future Vision of Short-term Exchange Programs between Students of Japanese and Thai Universities: From the Perspective of Learners and Teachers in Thailand

Kyoichi Yokota\*

*Theodore Maria School of Arts, Assumption University*

Yoko Kanome

*Japanese Language Institute, Tokyo International University*

## Abstract

This study examined how learners and teachers of Japanese in a Thai university perceived the short-term cultural exchange programs conducted by accepting students from Japanese universities and what programs should be conducted in future. We carried out a questionnaire survey for the learners and teachers of Japanese asking for their opinions on their experiences with the three exchange programs which differed from each other by presence or absence of preparation, duration of the program, and type of activities. The results showed that the learners perceived the programs beneficial because they believed that they succeeded in 1) practicing the Japanese language, 2) gaining knowledge and raw information about Japan and the language, 3) building confidence in Japanese, 4) raising awareness of their Japanese proficiency, 5) increasing motivation and willingness to learn, and 6) fostering a new friendship through interactions with native Japanese speakers of the same age group. However, it was revealed that teachers did not always perceive the projects effective due to inadequate prior consultation and preparation of the program between participating universities and insufficient time for the participants to perform activities as well as the lack of learner-centered activities. Findings suggested conducting a program in which both learners of Japanese and Japanese university students perceive themselves as a provider and a receiver of knowledge and experiences and engage in common activities collaboratively in order not only to maximize their own learning and that of their peers but also to foster friendships.

**Keywords:** short-term exchange, learners of Japanese, Japanese university students, collaborative learning, learning and friendship

---

\* Corresponding author's e-mail: kyokota@au.edu

## 1. はじめに

海外における日本語教育の現場において、学習者は教師以外の目標言語話者と直接交流する機会に乏しく、以前よりその意義や重要性が指摘されてきた(トムソン・舛見蘇 1999)。そのため、タイの高等教育の場においても、インタビュー活動(小池 2001)、一般日本人家庭訪問(山口 2001)、一般日本人家庭ホームステイ(深澤 2005)、一般日本人を教室に迎え入れ教育活動を行うビジターセッション(森 2005、山口 2001、山本 2000)、一般日本人を招いて行う観光ガイド実習ツアー(村木 2006、吉田 2005)のように、タイ在住日本人主婦や日本人会メンバーなど、地域社会における日本人を学習リソースとして捉えた教育活動の実践が報告されている。

社会のグローバル化が進んだ今日では、異文化理解などを目的に短期間学生を訪タイさせる日本の大学が増え、受け入れ先であるタイの高等教育機関においても、日本語学習者と同年代の日本人との交流を重視した学習活動が増加している。しかしながら、送り出す側だけでなく、受け入れ側にとっても有益になるような形で交流が行われているのだろうか。そこで本稿は、タイの日本語学習者及び日本語教師が2015年に行った日本人大学生との交流をどのように捉えたのか、また、今後はどのような交流をすべきなのかについて明らかにする。

## 2. 先行研究

日本では、2012年、文部科学省が、国際社会で活躍するグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力強化を目的に、ASEAN諸国等の大学に対する日本人学生の送り出しと

日本における外国人学生の受け入れを推進する国際教育連携の取り組みを支援する「大学の世界展開力強化事業～ASEAN諸国等との大学間交流形成支援」を開始した。鹿目他(2015)は、その一環としてバンコクにある国立大学にて実施されたStudent Exchange - Nippon Discoveryプログラム(以下、SENDプログラム)における、日本人大学生4名とタイ人日本語学習者108名との3週間にわたる交流が、日本語学習者にもたらした利点について、アンケート調査を行った。その結果、日本人大学生による教室内での日本語指導や指導支援などの教育活動と、教室外での日本文化紹介などの文化活動が、日本語習得に対する意欲や日本に対する興味や理解の高まりをもたらすなど、日本語学習者の心理面において利点があることが判明した。また、日本語学習者が、同年代の日本人との交流を「教室で学習し身に着けた日本語を試す場」としただけではなく、日本人大学生を「同年代の日本人を身近に感じられる環境で、現代の生の日本や日本語、興味の対象である漫画やアニメなどに代表されるような最近の日本文化について、新しい知識を与えてくれる人的リソース」として捉えたことも明らかとなった。このことについては、タイ側のSENDプログラム担当教師が、プログラム実施に当たり望んでいたことと一致したという結果も明らかにされた。

高橋(2016)は、SENDプログラムとして、日本人大学生3名が、タイ東北地域の国立大学教育学部日本語教育課程で学ぶタイ人大学生31名とともに、地域の初等・中等機関の児童・生徒に対し実施した、日本文化紹介や文化体験活動がもたらした利点や意義について調査した。その結果、バンコク以上に日本人と日常的に接触

できる機会に乏しい地域において、同年代の日本人大学生との活動が、タイ人大学生の実践的な日本語使用を必然にし、非母語話者教師としての役割を実感させる場となっただけではなく、真正性のある日本語でのコミュニケーションを求める児童・生徒の、日本語学習に対する動機付けや意欲の向上に貢献したことが明らかになつた。

一方、タイの高等教育機関においては、日本から訪問団を受け入れて、日本語学習者と交流を図ることに対し、懸念も指摘されている。鹿目他(2015)によると、大学生を送り出した日本の大学と、その大学生を受け入れたタイの大学との間に、日本人大学生の交流への関わり方について意見の相違があつたという。日本の大学は、異文化理解や日本に対する客観的理解を深めることを目的に、日本人大学生にタイの大学の実際の授業で日本語を指導する役割を課したが、タイの大学は、TAとして教員をサポートする役割や、今の日本についての知識を学習者に与えるリソースとしての役割を求めていたという。また、日本の大学や団体等から事前連絡がなかつたり、日本人訪問者が旅行気分であつたりするなど、受け入れ側にとって計画的に授業に活用できる団体の訪問が少なく、受け入れ側から訪問する側へ配慮を促す訴えも見受けられる(山口 2000)。

以上の研究により、タイの高等教育機関において、日本人大学生の短期訪問を受け入れ、日本語学習者と交流を行うことの意義や利点、並びに問題点が明らかになつた。しかし、多くの

日本の大学から大学生を迎える、様々な交流が行われている今日において、タイの大学における日本語学習者と日本語教師がどのような交流を望んでいるのかについては、十分な検証がなされているとは言えない。したがつて、日本語学習者と日本語教師がタイプの異なるいくつかの交流をどのように評価したのか、そして、今後はどのような交流を実施すべきなのかについて明らかにする必要があると考える。

### 3. 研究目的

本研究は、タイの大学における日本語学習者と教師が、日本から来タイした大学生と実施したタイプの異なる3つの交流をどのように捉えたのか、また、今後はどのような交流を実施すべきなのかについて、検証することを目的とする。

### 4. 調査概要

#### 4.1 調査方法及び参加者

本調査では、2015年にバンコク郊外にある私立大学で実施された、3種類の日本人大学生との交流(以下、交流A, B, C)に参加した、外国人留学生を含む日本語学習者並びに担当日本語母語話者教師を対象に、質問紙調査(表1<sup>(1)</sup>)を実施し、42名<sup>(2)</sup>の日本語学習者及び3名全ての教師から有効な回答を得た(表2<sup>(3)</sup>)。日本語学習者42名のうち、交流参加以前に日本への渡航経験がなかつた者は18名(42.9%)で、日本語母語話者教師以外の日本人との接触が0回だつた者が7名(17.9%)であった。

表1 アンケート調査項目

	日本語学習者	教師
1.	今回の交流は有益でしたか。その理由は何ですか。	今回の交流で、期待したことは何ですか。
2.	日本人大学生と交流して、何を感じましたか。	今回の交流は、期待に応える結果となりましたか。その理由は何ですか。
3.	日本人大学生と交流して、何を得ましたか。	今後も、日本人大学生との交流を続けていきたいと思いますか。その理由は何ですか。
4.	日本人大学生と交流して、ますます日本に興味を持つようになりましたか。	今後、日本人大学生との交流に求めるることは何ですか。
5.	今後、日本人大学生との交流を通して、何を学んだり、経験したりしたいですか。	-

表2 各交流の参加者数及びアンケート調査有効回答者数

	参加者数		有効回答者数	
	日本語学習者	日本人大学生	日本語学習者	教師
交流 A	バ*:13名 オ*:12名	20名	7名	1名
交流 B	16名	14名	12名	1名
交流 C	29名	6名	26名	1名

\*Abbreviation: バ=バディー、オ=イベント・オーガナイザー

#### 4.2 交流活動

本稿の調査は、準備の有無、期間、活動内容に関してタイプの異なる3つの交流を対象とした(表3)。交流Aは関西地方の私立大学より夏季研修実施の依頼を受け、10日間にわたって行われた。タイの大学生は、同年代の日本人と親しくなり、教室での作られた環境ではないところで日本語を使用し、日本や日本語に関する学習意欲や理解を深め、自国の文化や社会に興味を持ち、外に向かって理解促進を働きかけることを目的に、引率教員2名と共に来タイした日本人大学生20名がキャンパス内の宿泊施設に入寮してから退寮するまでの間、食事や買い

物などを含めた日々の生活を共にしながらサポートするバディーや、バンコク郊外の観光地や社会的弱者支援施設を訪問する一泊二日のフィールド・トリップでのトランスレーターやイベント・オーガナイザーとして交流に参加した。本調査では、バディー、オーガナイザー、またはその両方の役を担った参加者20名のうち、ビジネス日本語主専攻の3年生及び4年生7名<sup>(4)</sup>から回答を得た。本交流の開催にあたり、事前に日タイの担当教員の間で教育目的やキャンパス内外における学習活動等について綿密な打ち合わせが行われた。また、当日、両大学の学生は初対面であった。

表3 各交流のまとめ

	教師間における準備	学生間の面識	期間	主な活動
交流 A	あり	なし	10日	バディー フィールド・トリップ
交流 B	あり	なし	1日(3時間)	プレゼンテーション キャンパスツアー(企画・実施)
交流 C	ほぼなし	なし	1日(1時間)	キャンパスツアー(同行、英語)

交流Bは関東地方の公立大学より、海外研修旅行の一環として、学生同士の交流会を開催したいとの申し出を受け、実施された。Public Speaking in Japaneseという、パブリック・スピーキングのスキルを身につけたり、発表や評価の仕方を練習したりすることを目的とするコースにおいて、授業の一回分(180分)を充てて行われ、授業に参加したビジネス日本語主専攻の4年生16名のうち、男女それぞれ6名<sup>(5)</sup>から回答を得た。当日は、日本人大学生14名と引率教員2名を教室に迎え、自己紹介を含めたオリエンテーション、日本人大学生によるキャンパスライフについての発表及び質疑応答の後、タイの大学生が、グループ毎に、テーマ別キャンパスツアーの発表を行い、実際に発表したツアーに日本人大学生を連れて行くという活動を行い、日本語での発表や会話といった日ごろの学習成果を試しながら、同年代の日本人大学生との新たな友人関係を育み、異文化交流に従事した。本交流の開催にあたり、事前に、日タイの担当教員及び本交流の企画を取り持った在タイ国際交流実施機関の教員との間で、合同授業を開催するための要望や授業案などが具体的に話し合われ、交流実施の数週間前から両大学において準備が進

められた。また、当日、両大学の学生は初対面であった。

交流Cは中部地方の短期大学から学生同士の交流を図りたいとの依頼を受け、実施された。Oral Comprehension and Expressionという、口頭でのコミュニケーション能力を伸ばすことを目的とするコースにおいて、授業の一部(60分)として行われ<sup>(6)</sup>、授業に参加したビジネス日本語主専攻、並びに副専攻の3年生及び4年生男女29名のうち、26名から回答を得た。当日は、日本人大学生6名と引率教員1名を教室に迎え、自己紹介を含めたオリエンテーションを行った後、大学職員によるキャンパスツアーに参加した。このツアーは英語で行われたため、日本語学習者は、通訳をしたり、追加情報を伝えたりする一方、自分たちが通う大学や日本の大学、それぞれの学生生活における違いについて日本人大学生と話すなど、日ごろの日本語学習の成果を試しながら異文化交流・理解の促進に取り組んだ。この交流の開催に際し、両大学の間で日程等に関する事前のやり取りはあったが、授業内容についての話し合いはほぼなく、日本の短期大学の依頼を基に、タイの大学が通常の授業の妨げにならない範囲で実行可能な活動を提案し

実施するに至った。交流A及びBと同様、当日、両大学の学生は初対面であった。加えて、教員も初対面であった。

## 5. 結果と考察

### 5.1 日本語学習者に対するアンケート調査

まず、今回の交流が有益であったかについて、交流Aと交流Bに参加した日本語学習者全員が有益であったと回答し、交流C

でも、26名中23名(88.5%)が有益であったと回答した。その理由として、友達ができた、日本人と日本語を練習した、日本語を練習した、異文化交流ができた、日本人<sup>(7)</sup>と話した、日本人<sup>(7)</sup>と会った、などが挙げられた(表4)。日頃、日本語での交流の対象が、日本人母語話者教師に限られている学習者にとって、今回の日本人大学生との直接交流が有益であったことが窺える。

表4 学習者が交流を有益であったと感じた理由

	交流 A(7名)		交流 B(12名)		交流 C(26名)	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
日本人の友達ができた	5	71.4	2	16.7	—	—
日本人と日本語を練習した	1	14.3	2	16.7	2	7.7
日本語を練習した	1	14.3	1	8.3	3	11.5
異文化交流ができた	1	14.3	1	8.3	2	7.7
日本人(日本語母語話者)と話した	—	—	4	33.3	10	38.5
日本人(日本語母語話者)と会った	—	—	1	8.3	3	11.5
その他	2	28.6	2	16.7	10	38.5

また、交流Aで最も多く見られた「日本人の友達ができた」(5名、71.4%)については、交流Aが10日間という比較的長い期間であったということや、バディーやフィールド・トリップという緊密な意思疎通を必要とする活動であったということ、更には双方の大学による事前の入念な準備があったということに起因すると考えられる。一方、交流Cでは、「日本人と話したこと(10名、38.5%)や、「日本人と会ったこと(3名、11.5%)、「日本人と日本語を練習したこと(2名、7.7%)などを有益と感じた学生が多くみられることから、今回の調査においても、タイにおける日本語学習者の多くは、日本人との接触が限られた状態

にあるということが浮き彫りとなった。

次に、日本人との交流を通して感じたことについて、表5が示す通り、A、B、C、いずれの交流においても、「同年代の日本人と話したことは、いい経験になった」との回答が最も多く見られ、交流AとBでは全ての学習者が、交流Cでも18名(69.2%)の学習者がこのように回答した。これは、普段の生活ではほとんど体験できない、日本人と一緒に活動するということができたことに加え、鹿目他(2015)が指摘しているように、日本語母語話者教師と異なり、日本人大学生が日本語学習者と年齢が近いため、親しみやすく、伝えたことが通じ合えたことに起因すると考えられる。

また、交流Aでは6名(85.7%)、交流Bでは8名(66.7%)、交流Cでは5名(19.2%)の学習者が、「自分が考えていたよりも、日本語で会話ができるこに気づいた」と回答した。また、「自信になった」

という回答も、交流Aでは5名(71.4%)、交流Bでは8名(66.7%)、交流Cでは7名(26.9%)の学習者がしてお、日本語学習を続けていくための意欲の向上がもたらされることが期待される。

表5 学習者が交流を通して感じたこと

	交流A(7名)		交流B(12名)		交流C(26名)	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
同年代の日本人と話したことは、いい経験になった	7	100	12	100	18	69.2
自分が考えていたよりも、日本語で会話ができるこに気づいた	6	85.7	8	66.7	5	19.2
自信になった	5	71.4	8	66.7	7	26.9
先生以外の日本人と話したことは、新鮮な経験だった	2	28.6	7	58.3	11	42.3
同年代の日本人の発話を理解するのは、難しかった	2	28.6	1	8.3	7	26.9
自分が考えていたよりも、日本語で会話ができないこに気づいた	-	-	4	33.3	11	42.3
先生以外の日本人の発話を理解するのは、難しかった	-	-	2	16.7	4	15.4
その他	-	-	-	-	3	11.5

一方、交流Bの学習者4名(33.3%)と交流Cの学習者11名(42.3%)が、「自分が考えていたよりも、日本語で会話ができないこに気づいた」と回答したが、これは、キャンパスツアーで必要とされる日本語が特殊なものであるということにも起因すると考えられる。そして、交流Cに限ると、大学職員による英語でのキャンパスツアーへの同行という活動内容や、参加者数の不均衡、大学間の事前の準備がほぼなかった点などが関係していると考えられる。また、同年代の日本人や先生以外の日本人の発話を理解することに難しさを感じた学習者が多かったことも明らかとなった。これは、「先生以外の日本人と話したことは、新鮮な経験だった」と回答した学習者が多かったことにも見られるように、タイでは日本語学習者が教師以外の日本人母語話者と接触する機会が限られているため、教師以外の日本語に

慣れていないことに加え、交流前に双方の学生間で交流がなく、当日初対面で交流が開始されたことなどに起因すると思われる。しかしながら、これら「負とも見られる気づき」も、今後の日本語学習における新たな目標へのモチベーションに繋がるものと考える。

そして、日本人との交流を通して得たものについて、表6が示す通り、交流Aでは6名(85.7%)、交流Bでは3名(25.0%)、交流Cでは6名(23.1%)の学習者が「日本語の知識」と回答した。また、「日本の文化や生活、日本人の考え方に関する知識」と回答した学習者も多く、交流Aでは3名(42.9%)、交流Bでは6名(50.0%)、交流Cでは9名(34.6%)がこのように答えており、鹿目他(2015)が指摘したように、日本人学生との交流において、日本語学習者が、日本人大学生を学習者自身のニーズに応えてくれる人的リソースとして

表6 学習者が交流を通して得たもの

	交流A(7名)		交流B(12名)		交流C(26名)	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
日本語の知識	6	85.7	3	25.0	6	23.1
日本の文化や生活、日本人の考え方に関する知識	3	42.9	6	50.0	9	34.6
友達	2	28.6	1	8.3	–	–
日本語を練習する場	–	–	2	16.7	2	7.7
日本語母語話者との接触経験	–	–	1	8.3	3	11.5
タイ語やタイ文化の教え方	–	–	–	–	2	7.7
ない(「わからない」を含む)	–	–	1	8.3	5	19.2
その他	1	14.3	1	8.3	3	11.5

捉え、日本語の授業ではなかなか得られない知識や現在の生の日本の情報を得ていたことがわかる。更に、少數ながら、「タイ語やタイ文化の教え方」という回答も見られ、学習者が自国の言語や文化を交流相手に伝える方法を学んでいたことがわかる。

一方、「日本語を練習する場」、そして、日本語母語話者と話したり、日本語母語話者同士の会話を聞いたりする、というような、「日本語母語話者との接触経験」を得た、という回答も見受けられ、タイでは、日本語学習者が、教師以外の日本人母語話者と接触したり、教室で学習した日本語を実際に使用したりする場が限られている現状が改めて浮かび上がった。また、「得たものがない」や、「何を得たのかわからない」と回答した学習者もいて、今後は交流の各活動に目的を持たせ、それを事前に学習者に周知させておく

ことが必要であることも明らかになった。

さらに、交流前と交流後を比べ、日本語学習者に起きた心理的変化について聞いたところ、表7が示すように、交流Aでは全ての学習者が、交流Bでは10名(83.3%)、交流Cでは20名(76.9%)の学習者が、ますます日本に興味を持つようになったと回答した。これを前述の、「今回の交流を通して、多くの学習者が『自分の日本語に自信を持つようになった』と感じている」と併せて考慮すると、タナサーンセーニー(2006)や鹿目他(2015)が述べているように、日本人大学生との接触が、日本語学習者に、日本に対するより深い興味、自らの日本語能力に対する気づき、今後の日本語学習に対する動機付けや意欲の向上をもたらすなど、日本語学習者の情意的側面にプラスの影響を与えたと考えられる。

表7 学習者が交流を通してますます日本に興味を持つようになったか

	交流A(7名)		交流B(12名)		交流C(26名)	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
持つようになった	7	100	10	83.3	20	76.9
持つようにならなかった	–	–	2	16.7	6	23.1

最後に、どんなことが学べたり、経験できたりする交流を今後は期待するかについて、表8が示すように、「日本文化」との回答が最も多く、交流Aでは4名（57.1%）、交流Bでは6名（50.0%）、交流Cでは8名（30.8%）の学習者がこのように回答した。また、「日本語」という回答も多く、交流Aでは2名（28.6%）、交流Bでは3名（25.0%）、交流Cでは10名（38.5%）の学習者がこのように回答するなか、注目すべきは「若者言葉」との回答である。「日本文化」や「若者言葉」といった回答が際立ち、そして、「日本人の考え方」や「日本人のライフスタイル」といった回答も見受けられることを考慮すると、日本人母語話者

との接触が教師に限られている学習者は、やはり今後も同年代の日本大学生との交流を、日本語の知識を得たり、練習をしたりする場として求めているだけではなく、教科書や普段の授業では得ることが難しい生の日本の情報が得られる場として求めていると言える。これに、今回の交流が有益であったと、ほぼ全員の学習者が回答し、その理由として挙げた、「日本人の友達ができた」を併せて考えると、学習者が求める今後の交流として、同年代の日本大学生と交流し、日本語の知識を得たり、練習をしたりし、日本の生の情報を得、結果として友達も得られる場、という形が浮かび上がってくる。

表8 学習者が今後の交流で期待する学びや経験

	交流A(7名)		交流B(12名)		交流C(26名)	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
日本文化	4	57.1	6	50.0	8	30.8
日本語*	2	28.6	3	25.0	10	38.5
発音	1	14.3	—	—	—	—
語彙	1	14.3	—	—	—	—
会話	—	—	2	16.7	7	26.9
若者言葉	—	—	1	8.3	3	11.5
日本人の考え方	—	—	1	8.3	2	7.7
日本人のライフスタイル	—	—	—	—	2	7.7

\*「日本語」の詳細が「発音」「語彙」「会話」「若者言葉」であった。

## 5.2 日本語母語話者教師に対するアンケート調査

まず、日本語母語話者教師が今回の交流活動に期待したことについて、以下の3点が挙げられた。

1. 学習者が自然な環境で日本語を使用し、日本語能力や言語運用能力を向上させるとともに、自分の日本語に自信を持つこと
2. 学習者が同年代の日本人と交流し、日本

や日本語に対する興味や理解を深めること  
3. 学習者が自国の文化や社会に対し見識を深め、日本大学生に理解を働きかけること

小池（2001）が指摘したように、タイでは、日本語学習者の多くが日常的に日本語母語話者と日本語で交流する機会がほとんどなく、現実の接触場面で生まれる多様な問題を体験し学びを得ることが難しい。そのため、本調査の教師も、現実

に近い日本語環境下で日本語母語話者と接触をする中で、学習者が言語知識を得たり、教室で学習したことを実際に試したりすることで、日本語能力や言語運用能力を向上させることを期待していることがわかった。また、学習者が同年代の日本人との交流を通して、現代の生の日本や日本語に触れ、日本や日本語に対する興味や理解を一層深めることを、教師が期待しているということも窺える。更に、異文化理解の観点から、学習者が日本に対する理解を深めるだけではなく、自国の文化や社会に対する見識も深め、日本人大学生に情報を発信し、自国に対する理解を働きかけ、双方向の異文化理解の促進に努めることも教師は期待していると言える。

次に、交流の結果について、担当教師がそれぞれどのように考えているのかについて、アンケート結果をもとに考察する。まず、交流AとBの担当教師は結果が期待に応えるものであったと回答した。その理由として、交流Aの担当教師は、交流開始当初タイの学生は、日本語がよくできる留学経験者などが中心となって、グループで日本人大学生とコミュニケーションを図っていたが、時間が経つにつれて、やり取りの内容への興味に引っ張られながら、各学習者がコミュニケーションを図れるようになったからと答えた。つまり、学習者が、自然な日本語環境下で日本語をコミュニケーションの道具として利用するという、日本語学習の本来の目的を達成する機会を得ることができたと言える。また、同教師は、バディーとしてタイ文化を紹介する活動や、日本人大学生と社会的弱者支援施設の子どもとの間の文化交流における橋渡し的役割を通じて、学習者が自国文化への理解を深め、自信や誇りを得ることにつながったのではないかという認識も示した。

交流Bの担当教師はその理由を、日本人大学生に対し、自作のキャンパスツアーのプレゼンを行い、自分たちのツアーを選んでもらい、そしてツアーに連れていくという一連の活動の目的が明確であったため、個々の活動に対する学習者の意欲が普段よりも格段に高まりを見せたからと述べた。更に、グループの各メンバーが責任感と緊張感をもって各活動をやり遂げたため、大きな達成感を得ることができたり、自分の日本語に自信を持つことができたりしたようだからと答えた。つまり、今回の日本人大学生との交流が、学習者に自然な環境で日本語を使用する機会を与えただけではなく、鹿目他(2015)が述べているように、学習者の情意面に関して、プラスの効果をもたらしたと考えられることが、担当教師の期待に応える要因であったと言える。

一方で、交流Cの担当教師は期待に応える結果にはならなかったと回答した。その理由として、タイの大学生29名に対し日本人大学生が6名と、人数の差が大きかったため、タイの大学生全員が日本人大学生と話す機会が与えられたわけではなかったこと、タイの大学生と日本人大学生が初対面だったため、特に内向的な学生は日本人大学生との精神的な距離を縮めることができず、1時間という非常に限られた時間内ではうまく会話ができなかったこと、そして、タイの大学生が主体となってキャンパスツアーを行ったわけではなく、大学職員の話を英語で聞くことが主体となってしまい、「日本語で話す」活動が積極的に行われなかつたことを挙げている。事前に、両大学が交流の目的を共有したり、その目的を達成するためにどのような形の交流が最適なのかを協議したりせず、タイの大学が通常の授業と直接関係のない活動を授業時間内に実施した点、日タイの学生

同士がeメール等インターネットを使用した事前交流を行い、心理的な距離がある程度縮まった状態を創出しておかなかった点など、改善すべき点が見受けられる。

しかしながら、日本人大学生との交流活動の今後について、今回期待した結果が得られなかつたと回答した交流Cの担当教師も含め、3名全ての教師が、今後も交流を実施していきたいと回答した。その理由として、交流Aの担当教師は、短期間でもまとまった数の日本人大学生をキャンパスに受け入れることによって、日本人の学生集団を利用して、現実に近い日本語環境を作り上げることが可能になり、学習者が自然な環境で日本語を使用する機会が得られるようになることを挙げた。また、交流Cの担当教師は、学習者が「教室内で教師によってコントロールされた日本語」ではなく、「教室外で実際に使われる日本語」に接し、日本語の難しさや自分の日本語能力の未熟さを感じてしまったとしても、生の日本語や自分の日本語の現状、更には、自ら得意・不得意を知ることで、学習者が学習動機を得たり、意欲を高めたり、これから日本語学習に役立てたりすることができる理由に挙げた。更に、交流Aの担当教師は、異文化学習やサービスラーニングといった活動が交流の目的を明確にし、その目的に向かって、日タイの学生が「協働」することによって言語活動が促進され、日本語習得のみならず、異文化理解や社会学習にも効果が望めることも理由に挙げた。タイにおける日本語学習環境の現状や、日本人大学生との交流がもたらす学習者の教育面や情意面への効果を考慮すると、タイの高等教育において日タイの大学生による交流活動は今後も続けていくことが望まれていると言える。

最後に、日本人大学生を受け入れる側であるタイの大学の日本語母語話者教師が、今後の交流活動に求めることについて、以下の回答が得られた。

- 高等教育の一環として、個々の教育活動に明確で達成可能な目的を持たせ、それを双方の学生と教師が共有すること
- 訪問側の大学生にだけ教育的価値があるのではなく、受け入れ側の大学生にも日本語学習において有益であること

まず、異文化理解という大きな目的のもとに実施される個々の教育活動の目的が適當かつ明確で、達成可能であり、訪問側と受け入れ側の大学生と教師が事前にそれを共有していることが求められていることがわかった。達成が難しい活動の場合、学生はやる気が持てず、達成感や自信も得られない。また、事前の理解及び共有なしには、高等教育の一環としての交流が単なる「おしゃべり」になり、「学び」は起こりにくい。異文化を理解するために、なぜその活動をするのか、その活動を遂行することによってどのような効果が生み出せたり、得られたりするのかということを、訪問側と受け入れ側の学生がそれぞれの立場から理解していることが重要であると考えられていると言える。

また、タイの大学の日本語母語話者教師が、訪問する側の大学生にだけメリットをもたらすのではなく、受け入れ側の大学生にも教育的価値をもたらす交流活動を求めていることも明らかとなつた。これまででは、日本の大学が学生による海外研修旅行の一環としてタイの大学を訪問する場合、何をするかは受け入れ側の大学任せとなり、受け入れ側の大学が通常の授業とは直接関係のない活動を交流活動として授業時間内

に実施し、来訪する日本人大学生をお客様として、タイの大学生が「接待」しなければならない場合も多く、山口(2000)が指摘したように、受け入れ側にとって、計画的に授業に活用できる団体の訪問は限られていた。しかし、受け入れ側は、訪問側に対して、訪問先で何を学ぶのかということに加え、自分たちの訪問がどんな価値を生み出せるのかということを考え、交流活動に目的意識をもって積極的に参加する、ということを求めていていると言える。一方、受け入れ側自身にも、訪問側のニーズに応えつつ、日本人大学生という貴重な学習リソースを生かし、日々の授業での学習に直結する活動において協働するなかで、学習意欲や積極性を高め語学力を向上させるだけではなく、達成感や自信も得られるよう努力することが求められるのではないかだろうか。

## 6. まとめと今後の課題

本調査は、タイの大学における日本語学習者と教師がタイプの異なる3つの日本人大学生との交流をどのように捉えたのか、そして、今後はどのような交流を実施すべきなのかについて考察するために行った。アンケート調査の結果から、90%を越える学習者が、今回の交流を有益であると感じていることが明らかとなった。これは、日頃、日本語母語話者というと、日本人教師としか直接交流が持てない学習者にとって、教師以外の「日本語母語話者」で、且つ、自分たちと「同年代」である「日本人大学生」と日本語を話したり、練習したり、異文化交流ができたりしたことが評価されたと言える。事実、学習者は今後期待する交流について、同年代の日本人大学生との交流を通して、日本語の知識を得たり、練習をしたりするだけではなく、生の日本情報が得られる場として

も求めている。また、学習者が、自身の日本語能力において「自信」や「気づき」を得、同時に日本語学習を続けていくための「動機付け」や「意欲の向上」を得、更には、「新たな友情」を育んだことも、大いに評価されるところである。

しかしながら、少數ではあるが、「ほとんど英語で会話した」、「時間が限られていた」、「ほとんど日本人と話さなかった」、「自信を無くした」といった回答も学生から挙がった。これは、今回の交流が期待に応える結果とならなかったと回答した交流Cの教師が挙げた、その理由(参加人数の差が大きかった、学生同士が初対面であったうえに、交流時間が短かった、活動が学生主体ではなかった)と呼応している。これに対して、交流Aの教師が今後も交流を実施したいとして挙げた理由、つまり、異文化学習やサービスラーニングといった活動が交流の目的を明確にし、その目的に向かって、日タイの学生が「協働」することによって言語活動が促進され、日本語習得のみならず、異文化理解や社会学習にも効果が望める、といったことに問題解決の糸口を見いだせると考える。

以上のことを踏まえると、今後、タイの大学における日本語学習者が、日本から来タイする大学生を迎えて交流を図るにあたり、どのような交流をすべきかが以下のように明らかになった。

1. 日本語学習者が、教室で勉強した日本語を実際に使って、コミュニケーションが図れる
2. 学習者が生の日本の情報を得られる
3. 学習者の情意面に効果がある
4. 交流で行われる各活動の目的が明確で、達成可能であり、事前に共有されている
5. 活動目的達成のため、協働できる

6. 日本語学習に効果があるだけではなく、異文化理解や社会学習にも効果が望める
7. 新たな友情が育める

現在、教育の分野においても、異なる文化や価値観を持つ他者が「対等」な存在であることを認め、「対話」を通してお互いを理解し、信頼関係を築き、知識や経験を補充しながら課題を成し遂げる、「協働」のプロセスを共有することによって、新たな価値を「創造」することができると考えられるようになった(池田・館岡 2007)。日タイの国際交流の場においても、訪問する側である日本人大学生も受け入れ側であるタイの大学生も、双方がお互いにとって知識や経験を提供も享受もできる存在であることを認識し、両者が対等に対話を重ね、相互理解の後に信頼関係や連帯感を構築し、その結果生み出される「学び」や「友情」という新たな創造を共有することが求められているのである。

なお、本研究は日本から来タイし、タイの大学における日本語学習者と交流を行った日本人大学生を調査の対象にしていない。「協働」によって双方向に有益で、教育的価値をもたらす交流を行うためにも、日本人大学生が交流をどのように捉えたのか、また、今後はどのような交流を望んでいるのかについて、今後は研究を進めていく必要があると言える。

## 注

- (1) 日本語学習者には英語で調査を行い、筆者が日本語に訳した。日本語母語話者教師には日本語で調査を行った。また、日本語学習者への質問4に限り、複数回答を認めなかつた。

- (2) 3名の学生が2つの交流に参加したため、延べ人数は45名である。
- (3) 交流Aにイベント・オーガナイザーとして参加した12名のうち、5名がバディーとしても参加した。また、交流Aに参加した日本語学習者の多くが、アンケート実施時にはすでに大学を卒業していた等の理由で連絡が取れず、本調査に参加できなかつたため、回答者数に影響が出た。
- (4) 7名は全て女子学生である。このうち2名は、交流Cにも参加した。
- (5) 女子学生1名が交流Cにも参加した。
- (6) 授業後、昼食会並びに文化交流(両校学生によるダンスの披露)が行われたが、受け入れ側であるタイの大学では授業の一部としては実施されず、したがって、本稿の研究対象から除外した。
- (7) 「日本語母語話者」という回答を含める。

## 参考文献

- 池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』、ひつじ書房。
- 鹿目葉子・横田恭一・石崎大地・篠原映美・成田ゆに・西田菜摘(2015)「タイの高等教育機関におけるC大学のSENDプログラムの役割とは—K大学での日本語指導・指導支援・交流活動の実践からー」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第12号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp. 67-76。
- 小池誠(2001)「インタビュー活動実践報告」『国際交流基金バンコク日本語センター紀要』第4号 国際交流基金バンコク日本語センター、pp. 81-94。

- 高橋美紀(2016)「SENDワセダ×コンケン大学教育学部の取り組みー初等中等教育でのティームティーチング実習ー」早稲田大学日本語教育研究科・日本語教育研究センター主催実践報告セッション『SENDプログラムにおける協働ー対等・対話・創造』発表予稿集、pp. 8-10。
- タナサンセーニー美香(2006)「日本人との接触が日本語学習者に及ぼす影響に関する一考察」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 海外調査報告書』、国立国語研究所、pp. 108-127。
- トムソン木下千尋・舛見蘇弘美(1999)「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者ーその問題点と教師の役割ー」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第9号、国際交流基金日本語国際センター、pp.15-28。
- 深澤伸子(2005)「タイ国内日本人家庭ホームステイプログラムは関わった人たちにどんな意義があったかー学習者・教師・日本人協力者3者の調査報告ー」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp. 201-206。
- 村木佳子(2006)「日本人協力者を招いた日本語活動ー日本語主専攻の学生による観光実習ツアーを例としてー」『国際交流基金バン

- コク日本文化センター日本語教育紀要』第3号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp. 147-156。
- 森康眞(2005)「一般日本人・日本語アシスタントによる「日本語教育活動」の意義ー異文化間コミュニケーションと日本語学習支援の立場からー」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp. 107-120。
- 山口雅代(2000)「授業におけるビジターセッションの効用」『国際交流基金バンコク日本語センター紀要』第3号、国際交流基金バンコク日本語センター、pp. 77-87。
- 山口雅代(2001)「チェンマイ大学におけるリソースの活用」『国際交流基金バンコク日本語センター紀要』第4号、国際交流基金バンコク日本語センター、pp. 123-128。
- 山本さゆみ(2000)「ビジターセッション実践報告」『国際交流基金バンコク日本語センター紀要』第3号、国際交流基金バンコク日本語センター、pp. 89-96。
- 吉田直子(2005)「チェンマイ大学ガイド実習「チェンマイ半日ツアー」の試み」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp. 85-93。